

(公印省略)

13病防第14号の10
平成14年 2月 1日

各関係機関の長 殿

福岡県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について(送付)

このことについて、病害虫発生予報第11号を発表したので送付します。

平成13年度病害虫発生予報第11号
主要病害虫の発生現況及び予報の概要

【野菜】

作物名	病害虫名	発生現況 (平成比)	発生予想 (平成比)
冬春トマト	菌核病 葉かび病	並 並	並 並
冬春ナス	すすかび病 うどんこ病	多い 並	多い 並
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病	少ない 並 やや多い	少ない 並 やや多い
イチゴ	うどんこ病 アブラムシ類 ハダニ類	やや少ない 並 少ない	やや少ない 並 少ない
キャベツ	黒腐病 菌核病 コナガ	少ない やや多い 少ない	少ない やや多い 少ない
レタス	灰色かび病	少ない	少ない
果菜類共通	灰色かび病	並	やや多い
野菜共通	コナジラミ類 ミナミキイロアザミウマ	少ない 少ない	少ない 少ない

- 1 トマトの葉かび病
 - (1) 予報の内容
発生量：平年並、前年よりやや多い
 - (2) 予報の根拠
 - ア 1月5半旬調査の結果、発病葉率は平均5.8%（平年：1.7%、前年：0%）であり、一部のほ場で多発している。
 - イ 気象予報では、2月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。
 - (3) 防除上注意すべき事項
 - ア 換気を行い、多湿にならないよう管理する。
 - イ 肥料切れにならないよう肥培管理を行う。
 - ウ かん水過多にならないように注意する。
 - エ 病勢が進展してからでは防除が困難であるので、発病前または発病初期のうちに防除を徹底する。
 - オ 発病葉は早めに除去し、ハウス外で処分する。
 - カ 防除薬剤については県野菜病害虫防除基準を参照する。農薬安全使用基準を守り、危被害防止に努める（以下の病害虫についても同様）
- 2 ナスのすすかび病（平成13年11月30日発表の注意報第2号参照）
 - (1) 予報の内容
発生量：平年より多く、前年並
 - (2) 予報の根拠
 - ア 1月5半旬調査の結果、発病葉率は平均32.9%（平年：14.9%、前年：38.8%）であった。
 - イ 例年、1月から発生が増加していく傾向にあり、本作で発生程度が低かった調査ほ場でも増加傾向にある。
 - ウ 気象予報では、2月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。
 - (3) 防除上注意すべき事項
 - ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、発病初期のうちに防除を徹底する。
 - イ 本病は薬剤防除だけで病勢の進展を抑えるのは困難なので、換気を行い、多湿にならないよう管理する。ただし、急激な温度・湿度変化は避ける。
 - ウ 草勢の低下で発病が助長されるので、着果量の調節や、適切な肥培管理を行う。
 - エ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
 - オ 本病の分生胞子は、曇天・雨天時に形成され、晴天時に飛散するので曇天・雨天後の晴天日に薬剤散布すると効果が高い。
 - カ 本病原菌の各種薬剤に対する感受性低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだロ・テ・ション散布を行う。
- 3 キュウリのべと病
 - (1) 予報の内容
発生量：平年・前年より少ない
 - (2) 予報の根拠
 - ア 1月5半旬調査の結果、発病葉率は平均0.2%（平年：11.0%、前年：17.5%）であった。
 - イ 例年、1月から発生が増加していく傾向にあるので注意を要する。

- ウ 気象予報では、2月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア 肥料切れになると発生が助長されるので、適正な施肥を行う。
- イ 換気を行い、多湿にならないよう管理する。
- ウ 本病原菌の各種薬剤に対する感受性低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだロ-テ-ション散布を行う。
- 4 キュウリの褐斑病
- (1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多く、前年よりやや少ない
- (2) 予報の根拠
- ア 1月5半旬調査の結果、発病葉率は平均3.5%（平年：0.4%、前年：4.3%）であり、発生程度は、ほ場により差がある。
- イ 気象予報では、2月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア 発生が多くなると防除が困難であるため、少発生のうちに防除を徹底する。
- イ 肥料切れになると発生が助長されるので、適正な施肥を行う。
- ウ 換気を行い、多湿にならないよう管理する。
- エ 本病原菌の各種薬剤に対する感受性低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだロ-テ-ション散布を行う。
- 5 イチゴのうどんこ病
- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年よりやや少ない
- (2) 予報の根拠
- ア 1月5半旬調査の結果、発病株率は平均0.8%（平年：2.2%、前年：1.9%）であった。
- イ 気象予報では、2月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア 本病の初発生は、新しく展開した葉の裏に認められるので、上位葉裏面を随時観察し、早期発見に努める。
- イ できるだけ不要な葉は葉かぎを行い、薬液が葉裏にもかかりやすくする。
- ウ 本病原菌の各種薬剤に対する感受性低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだロ-テ-ション散布を行う。
- 6 イチゴのハダニ類
- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年より少ない
- (2) 予報の根拠
- ア 1月5半旬調査の結果、寄生株率は平均0.2%（平年：2.4%、前年：2.1%）であった。
- イ 例年、2月以降から発生が増加していく傾向にあるので注意を要する。

ウ 気象予報では、2月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発生後は防除が困難なので、発生状況をよく観察し、早期発見、早期防除に努める。

イ 摘葉された葉に寄生しているハダニは、摘葉後急速に移動するので、ほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し、処分する。

ウ 本害虫の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

7 キャベツの菌核病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 1月5半旬調査の結果、発病株率は平均0.7%（平年：0.3%、前年：0.8%）であった。

イ 気象予報では、2月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病株を放置すると感染源となるので、ほ場外へ持ち出し焼却処分する。

イ 菌核は土中で2～3年は生存し次作の感染源となるので、発生を認めたとほ場では、収穫終了後に残さをすき込まないようにする。

8 果菜類の灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

平成14年1月31日発表の速報第9号参照

2月の気象予報（1か月）

（予報期間 1月26日～2月25日）

2002年 1月25日
福岡管区気象台発表

【概要】

向こう1か月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多く、日照時間は平年並の可能性が大きいです。

【要素別確率】

（単位％）

要素	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気温	10	30	60
降水量	20	30	50
日照時間	20	50	30

- < 1週目の予報 > 1月26日～2月1日
この期間の平均気温は、平年より高い可能性が大きいです。
- < 2週目の予報 > 2月2日～2月8日
この期間の平均気温は、平年より高い可能性が大きいです。
- < 3～4週目の予報 > 2月9日～2月22日
この期間の平均気温は、平年より高い可能性が大きいです。

参考資料

福岡における平年値

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間と1週目、2週目、3～4週目の平均気温

向こう1か月			平均気温（ ）		
平均気温（ ）	降水量(mm)	日照時間(h)	1週目	2週目	3-4週目
6.6	71.3	122.8	5.9	6.2	7.1

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除について、ホームページとテレホンサービスでお知らせしています。アドレス及び電話番号は下記のとおりです。

ホームページアドレス

www.jpnp.ne.jp/fukuoka

電子メールアドレス

kfok0301@sp.jpnp.ne.jp

テレホンサービス

092-928-6401（普通作）

092-928-6402（果樹）

092-928-6403（野菜・茶）